

プロジェクト型協働作文活動を通してみる相互作用と作品・学習者への影響
Interaction Seen through Project-based Collaborative Writing and Influence on Works
and Learners

野口潔, 上智大学
田辺和子, 日本女子大学
大須賀茂, シートン・ホール大学
岡田彩, オクラホマ大学
Kiyoshi Noguchi, Sophia University
Kazuko Tanabe, Japan Women's University
Shigeru Osuka, Seton Hall University
Aya Okada, University of Oklahoma

1. はじめに

外国語学習での相互作用の利点が理論・教育両面から主張され、口頭での協働学習が実践・研究されてきたが、近年作文での協働学習として協働作文が注目されるようになってきた。協働作文とは2人以上が構想から完成まで同程度かかわり1つの作品を作り上げるものである(Storch 2013)。日本語教育では作成過程に他の学習者がかかわるピアレスポンスが盛んであるが、作文は1人のものという観念が強いせいか、協働作文に関する報告はほとんどない。そこで本研究では協働作文をプロジェクト型学習に組み入れて実践した。本稿が実践を通して考察した内容は、(1) 学習者間の相互作用がどのように作文に反映されたか、(2) 学習者間の相互作用を通して学習者の言語習得は見られるか、(3) プロジェクト型学習を通して学習者は何を学んだかである。

2. 先行研究と研究課題

先行研究については、相互作用に表れる人間関係に関するものと言語習得についてを概観し、それぞれから見えてくる課題を明らかにしたい。

2.1 人間関係

先行研究は、相互作用に表れる学習者の人間関係が言語学習に影響を及ぼす要因の1つであることを明らかにしてきた(Cho, 2017; Li & Zhu, 2017; Storch, 2009 他)。Storch (2009) は、相互作用に見られた学習者同士(2人)の人間関係を平等性と相互性を使い分類した。2人の関係が等しく(平等性が高く)、しかも意見などを言い合う(相互性が高い)ペアを「協働的關係」と呼び、もっとも言語習得に効果的な発話が多かったこと、また、1学期を通して2人の関係性は安定して変わることがなかったことを報告している。これに対し、Li and Zhu (2017) と Cho (2017) は、コンピュータを介した3人での協働作文の場合、タスクが変わると相互作用に表れる人間関係も変わる事例を報告している。

いずれにしてもこれまでの研究は、相互作用に表れる人間関係に焦点が当てられ、また、人間関係が形成される要因を明らかにすることに力点が置かれてきた。その為、相互作用がどのような作品を作り上げるのかについての詳しい分析・考

察は極めて少ない。理想的だとされる「協働的關係」にある学習者達による相互作用がどのような作品を作り上げるのかを詳細に記録していくことは、協働作文のプロセスを明らかにするだけでなく、今後同様の協働作文を実践する際の見本とすることも可能であり、重要な研究対象であると考ええる。

2.2 言語習得

先行研究は、相互作用での話し合いの質が文法や語彙習得のために重要であることを明らかにしてきている。Storch (2009) は、英語の定冠詞について、ペアで説明・例を示し合うといった、質的に高い話し合いがなされた場合、1週間後のテストで正しく使えるようになったことを報告している。

ただ、これまでの習得に関する研究は、上の定冠詞の例のように、研究対象を絞り、そのための相互作用とテストを設計しており、自然な産出データを確認しているわけではない。そのため、テストの時点で学習者が自然な会話の状況でも同じように産出ができるのか疑問が残る。自然な会話のやりとりの中での習得過程を記録したものは、Ohta (2001) の日本語の終助詞「ね」の報告など報告数は限られている。一つでも多く、自然な会話での習得過程を詳細に記録・分析していくことは、相互作用の意義の視点から見ても重要な事例研究であると考ええる。

2.3 研究課題

先行研究から見えてきた問題点をもとに下記の研究課題を設定した。今回はプロジェクト型の協働作文を実践したため、そこから学習者が何を学んだかも研究課題とした。

1. 相互作用はどのように進み、成果物（スクリプト）にどのように反映されるか。
2. 相互作用を通して学習者の言語習得は見られるか。
3. プロジェクト型学習を通して学習者は何を学んだか。

3. 実践内容

実践期間、実施機関、学習者、指導者は以下の通りである。

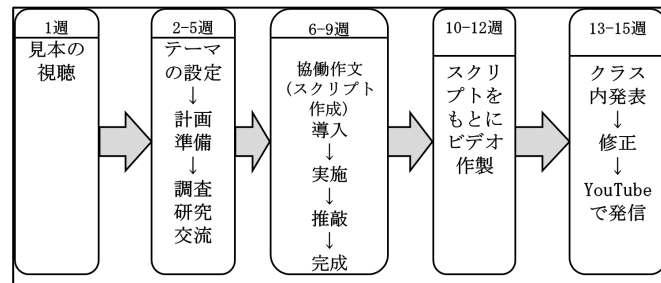
- 実施期間：2018年秋学期（9月末から2019年1月末）
- 実施機関：日本の大学の上級レベル日本語集中コース（90分授業が週8コマ、15週）。5コマ＝読解・文法、2コマ＝会話、2コマ＝漢字、1コマ＝作文。
- 学習者：6名（女子5名、男子1名）：アメリカ、イギリス、イタリア2名、台湾、ベラルーシ。
- 指導者：野口潔（1週間に1コマの作文クラスを担当）

実践の目的は、「人・文化・社会とつながりを持ちながらグループで深く考えぬいたメッセージを、深く考えぬいたオリジナル作品（ビデオ）を通してYouTubeで世界に発信する」である。YouTubeで公開することを嫌がる学生がいることも想定はしていたが、今回はみな公開に同意した。

プロジェクトの流れは図1のようになる。

1週目に完成作品のイメージを持ってもらうために見本を見せた。日本語であまりよいものがなかったため、日本語のスク립トがついている TED TALK を使用し、全体の構成、意見の示し方などを確かめ、目的とするビデオクリップのイメージを持ってもらった。同じ目的意識を持った者同士のほうが、人間

図1 プロジェクトの流れ



関係がうまくいくとの先行研究 (Li & Zhu, 2017) を参考に、2週目に同じような興味をもった3名で2つのグループを編成した。それぞれが話し合いでテーマを決め、1つのグループが「日本の風俗について (以下、「風俗グループ」)」もう1つのグループが「日本のレジ袋、プラスチックゴミの問題 (以下、「レジ袋グループ」)」をテーマに選んだ。

本稿では、理想的と言える「協働的關係」にあった「風俗グループ」に焦点をあてることとする。

4. データ分析

「風俗グループ」の3名は、いずれも仮名でアナ (Anna:略称 A)、ベッキー (Becky:略称 B)、キャシー (Cathy:略称 C) である。本稿では、下記のデータを使用した。

1. 協働作業中の会話 (録音) : 4コマ分 (11月21日から12月12日)
2. プロジェクトワーク前と後の個人作文 : 同一の課題で作成 (詳細は 4.3 を参照されたい)
3. 個人インタビュー (半構造化 : 12月と1月の2回)
4. 活動の振り返り (質問用紙)

4.1 研究課題1

研究課題1「相互作用はどのように進み、成果物 (スク립ト) にどのように反映されるか」については、協働作業中の会話のトランスクリプトと成果物であるスク립トの内容を比較・分析した結果、大別すると下に示した4通りの決定過程が明らかとなった。

1. 1人が出したアイデアが、他の2人に認められ、比較的簡単に採用される=4例
2. 1人が発した表現 (語彙) が、他の2人に発展的に解釈され、次第に内容が鮮明化、具体化し、採用される=2例
3. 1人が出したアイデアが、他の2人に認められ、補足、修正などされ、採用される=4例

4. 1人が出したアイデアが、他の2人に認められ、しばらく維持されるが、別の1人が後から出したアイデアのほうがより適切だということになり、廃案となる。後出のアイデアが採用される=2例

上記1のように比較的簡単に1人の考えが採用された場合と、2、3のように長い時間をかけて修正や追加の後、あるいは4のように、方針転換がなされて決まった場合がある。なお、話し合いの結果、結局採用されなかったアイデアがこの他に9例あった。

本稿では、上2の1例を非常に興味深い相互作用の例として取り上げたい（データ1）。この例では、1人が使った語彙が、3人の間で連想・解釈され、マインドマップのようにつながっていき、一つのアイデアとして結実している。

なお、以下のトランスクリプトで使用している記号は宇佐美（2015）の「基本的な文字化の原則」（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）に示されたものを使用している。発話1回分は、Cho（2017）に倣い、（a）発話が終わった、（b）別の発話者が話し始め、言いかけていた発話を維持する状況をやめた、のいずれかとする。データの左側にある数字が、その日の発話の何番目かを示している。

データ1 決定までの相互作用例（必要箇所のみ抜粋）

【11月21日】アナ（A）、ベッキー（B）、キャシー（C）

記号はBTSJ（宇佐美,2015）方式を採用：
【】は文脈の説明、 <> [<] は次の発話と重複、 () はあいづち、
↓はイントネーション下降、 ## は聞き取り不能、 右 () 内は経過時間

20 B **【オープニングをどうするか】** 意外と車とかよくない？ (3:51)

24 B **【前略】** そのメタファーとして結構いいと思うのね。車その動いてるから、right? Like we're moving along the passing knowledge.

33 C 車の後ろの3人席のところ座って、ほんとにそれでスタートするの？ **【中略】** 3人、教室より車に座って、これから上野に向かってますとか。
【いったんトピックが離れる：言いたいこと、他の可能性など】

66 C タイトル何にします？ (11:39)

75 A 知らない、あのう、知らない世界の旅<は> [<]

102 C **【ネットの映像を見て】** he (うん) introduces 秋葉原street. (17:11)

103 B **【前略】** 今から、そのう、ま、第、ま、第一の旅 (I think) に、上野に向かってるとか

111 C **【前略】** And then show clips, like “Oh, this is Japan’s 歌舞伎町” **【後略】**
【いったんトピックが離れる：音楽についてなど】

150 A これを全部旅として、したら、例えば、今いろんな、東京のいろんなところに行ってるじゃん (あー)、**【中略】** 旅として、##とゆうのはすごいいいと思う。(23:51)

159 B **【前略】** So I guess, are we agreed that we gonna do location, location, location ↓

160 C うん、いいと思う。(25:25)

データ 1 は、アナ (A)、ベッキー (B)、キャシー (C) の会話で、会話内容は、作成するビデオクリップのオープニングからメイン部分をどうするかである (一部抜粋)。決定したのは「旅をイメージして、東京の街から街へ移動するという構成方針」である。

データ 1 では、まず、ベッキー (B) がオープニングで「車」を使ったらどうかと提案する (発話 20)。続けてベッキーは、車を使う理由を「車」は「動いてるから」、次々と飛び込んでくる情報のメタファーとして良いのではないかと説明する (発話 24)。この提案に関し、キャシー (C) が半信半疑で「車の後ろの 3 人席のところ座って、ほんとにそれでスタートするの?」「車に座って、これから上野に向かってますとか」と確認する (発話 33)。このキャシーの発話は、確認として機能してるが、それだけでなく、連想による独自の解釈も加えられている。発話 33 まで、だれも「座って」「上野に向かって」といった表現は使っていない。「車」「動いてる」ということからキャシーが連想し、「座って」「上野に向かって」を使ったと考えられる。つまり、この発話は確認として機能しながら新しいアイデアも加えられ、提案もなされていると捉えることができる。

その後、タイトルをどうするかという話になり (発話 66)、アナ (A) が、「旅」という語彙を使う (発話 75)。これは今までの「車」「動いてる」「座って」「上野に向かって」などから連想した表現と考えることができる。それまでにベッキーとキャシーのやりとりに全く「旅」に関連した表現がなかったならば、恐らく「旅」という表現は出なかったのではないかと推察する。

それから、少し時間をおいて、キャシーがネットのビデオクリップを見て、その中の人物が秋葉原を紹介していると説明する (発話 102)。それを聞いたベッキーが、それなら私たちは「第一の旅に、上野に向かっている」と紹介すれば良いのではないかと提案する (発話 103)。ここで旅の順番を思わせる「第一」という表現が使われている。つまり、この時点でベッキーは旅をする場所を少なくとも 2 か所以上想定していると考えられる。また、ベッキーは、アナの使った「旅」とキャシーの「上野へ向かって」という表現を繰り返し、会話の結束性を維持していることも確認できる。続いて、キャシーが、視聴者にインパクトを与えられるように工夫して「歌舞伎町」をビデオクリップにいれたらどうかという趣旨の提案をする (発話 111)。

一旦話が逸れた後、アナが今までの話をまとめるように、私たちは「東京のいろんなところに行ってる」からビデオクリップの内容を「全部旅として」捉えたらどうかと提案する (発話 150)。そして、その後まもなく、ベッキーが「So, I guess, are we agreed that we gonna do location, location, location」と他の 2 人に確認をとる (発話 159)、これも発話 33 と同様単なる確認事項ではない。なぜなら「場所、場所、場所へ移動していくようにビデオクリップを構成しよう」とは誰も提案していないからである。

発話 159 は、それまでの、ベッキー自身の発話も含めた関連する表現を的確に解釈し、まとめた上での確認表現だと考えることができる。発話 20 のベッキー自身の発想「車」「動く」に、キャシーの発話 33「座る」「上野に向かう」が

アナの発話 75「旅」を連想させ、その結果、ベッキー自身の発話 103「第一の旅」という発言から分かるようにベッキーは旅先をいくつか想定する。次にキャシーが発話 111「歌舞伎町」を、そしてアナが発話 150「いろいろなどところに行ってる」と述べたことで、旅先を複数にすることが 3 人全員の共通認識となり、ベッキーの発話 159 が産出されたと考えられる。

以上の考察からデータ 1 の特徴として下の 3 点が挙げられる。

1. 発想・連想・解釈によって、時間と内容を飛び越えた結束性が見られる。
2. 3 人による発想・連想・解釈があたかも 1 人の頭脳の中で繰り広げられたかのようにまとめ、1 つの明確なアイデアとして結実している。
3. 誰の意見が採用されたのか、誰が決めたのかが明言できないほど 3 人のアイデアが融合したものとなっている。

4.2 研究課題 2

研究課題 2「相互作用を通して学習者の言語習得は見られるか」については、学習者アナの語彙「経営する」のアウトプット（発話）が不確実な状態が、相互作用の末、正確に発話できる状態になった事例を紹介したい（下記データ 2）。

データ 2 言語習得例（必要箇所の抜粋）

<p>【11月28日】</p> <p>361 A 【前略】 お店の、お店を栄養する、栄養じゃなくて、えー（自嘲）何？ [答えを求めるが誰も答えない]、えっとー、経営？する？人たちの意見。だからそっちはビジネスだからやる、【後略】</p> <p>【12月5日】</p> <p>81 A smooth transitions 〈笑いながら〉 はい、あとね。あ、ここはね、たぶんあのう、新宿では、その経営？（B：うん） する人（B：うん）びとの立場、たとえば話した人が、【後略】</p> <p>88 A そそそ、で、できればほんとにどれぐらい稼ぐ、稼ぐことができるかってゆうのも、なんか、そうゆうところをえいyoう、えー経営する人として、それはちょっと私のラーメン屋さんの店長さんに聞いてみる。</p> <p>159 A 【前略】 情報とあと男性の、なんか、えー、経営してる人とあとお客さん（B：うん）、【後略】</p> <p>217 A 【前略】 ドアの近くの、ところで（B：うん）、他の、その、えい、経営する（B：うん） 人たちとかもいたのに、</p> <p>【12月20日】（インタビュー中の発話）</p> <p>【前略】 そういう風俗で働いている人から、そういう場所経営する人まで、そこのお客さんと、あとほんとに若者とも、私たちの周りにいる人々と、すごくたくさんのお話、できて。【中略】 彼女はアーティストで、キッチンカーとかも経営してる人、【後略】</p>

2018 年 11 月 28 日に、アナは、まず「経営する」を「栄養する」と言い間違える（発話 361）。直後に「栄養じゃなくて」と言い、自嘲していることから、すぐ間違いに気づいていることが分かる。そして、「何？」と 2 人の聞き手ベッ

キーとキャシーに助けを求めるが、結局自分で考え、経営すると言っている。しかし、「経営？する？」と語尾を上げていることから、自信のない状態であることが伺える。

1週間後の12月5日、同じように「経営？」と語尾を上げ、自信のない状態が続いていることが分かる(発話81)。次に、発話88で「栄養」に近い言い方をしており、アウトプットの正確さとしては1週間前に近い状態に戻っている。発話159ではあまり考えずに言っているが、発話217では、再度「えい」が先に出てしまうと行った、進歩と後退を繰り返す状態が観察できる。

しかし、それから15日後の12月20日の指導担当野口とのインタビューでは、まったく言い間違えが見られず、正確なアウトプットがなされている。

アナは、いずれの場合も聞き手を十分意識している。11月28日の発話361では「何？」と助けを求め、また、経営？する？と語尾を上げ、その不確かさを聞き手にアピールしている。同様の語尾上げは12月5日の発話81でも確認できる。更に、5日の発話81と217ではベッキーのあいづちが直後に確認できる。つまり、アナは聞き手の支援(時には暗黙、時にはあいづち)を受けながら、発話の調整を進めていると考えられる。

課題2の答えとして以上の内容を下1と2にまとめた。

1. 相互作用の中で、アナが「経営する」の発話を、進歩と後退を繰り返しながら調整を進め、正確に発話できるまで内化する過程が観察された。
2. この事例の場合、Private Speech (Ohta, 2001)とは異なり、聞き手が支援者として存在し、それを話し手が意識することで語彙の調整が促進した。

4.3 研究課題3

研究課題3「プロジェクト型学習を通して、学習者は何を学んだか」については、学習者によって程度差が見られた。アナが教室外でもっとも積極的に広く様々な人とのつながりを持ち、風俗産業そして異文化間コミュニケーションについての深い見識を得た。それに続くのがベッキーで、学習がもっとも浅いと判断したのがキャシーである。以下、いくつかのデータをもとに論じたい。

データ3 アナのインタビューでの発言(一部抜粋)

わたし、10人のシェアハウスに住んでいますね。日本人もいるし、外国人もいるし、みんな、こういうプロジェクトが行っているというのが、みんなに知られていることですので、その人々とも一般的な話よりも、もっと深いお話ができていますので、【中略】意見がたくさんありますので、異なっているし、ケンカではないですけども、すごく異なって怒ったこともありますし、【中略】一番最初のインタビュー先、無料案内所、ホストになりたい人ともけっこう長く話してて、インスタグラムの連絡とってるんですけども、わたし、そんなに、もちろん連絡とるのはいいんですけども、無料案内所で働いてる人とあまり友達になりたいのわけでもないから、彼からずっと連絡があるし、インスタストーリーとかするとき、私のストーリーをコメントとかしたり、ちょっとうるさいなと思いました。

上記データ 3 は、アナが教室外でどのような人とどのように「風俗」について話し合いをもったかを話しているインタビューの一部である。ここで話している以外にもアナは、アルバイトを何か所かですており、そこで働く人達、また他の留学生、旅先の日本人、風俗で働く人、経営者など様々な人と交流をもち、データ 3 にあるように、時には考え方の違いからケンカになるようなことや（4-5 行目ボードタイプ部分）、しつこく連絡を受け、嫌な思いも経験している（一番下のボード部分）。そして、これらの経験がプロジェクト後の作文にも色濃く反映されている（データ 4）。

データ 4 はプロジェクト終了後に「異文化間コミュニケーションについて、あなたが考えることを 10 行以上書きなさい」という課題・指示のもと書いてもらった個人作文からの抜粋である。なお、プロジェクト実施前にも全く同じ課題・指示で個人作文を書いてもらっている。

データ 4 プロジェクト後の個人作文からの抜粋

【アナの作文からの抜粋（1 から 4）】 ボードは筆者による

1. 異文化を理解出来るまではたくさんの**摩擦**やその文化に対しての**違和感**も感じられる。
2. 学んだ言葉でコミュニケーションを取ると言うのは**容易なものではない**。
3. 人と人の間に**誤解**が生み出されることがある。
4. **摩擦や誤解**などが自分の力になり、**個人の成長を助るもの**なのではないかと思う。

【ベッキーの作文からの抜粋（5 と 6）】

5. **皆さんを受け入れ、人とのつながりを強め、分かり合うことが重要だ**と思います。
6. **きつい判断をせず、新たなものを学びたい**という気持ちを抱けば、自分の世界観は広くなると、**私は信じます**。

アナ、ベッキー、キャシーは、プロジェクト前と同じ課題について書いたのだが、それぞれ内容は全く異なるもの（語彙の分析比較から）であった。3 者の作文を比較すると、内容の深さという点で異なっている。データ 4 に抜粋したが、特にアナは異文化間コミュニケーションにおける摩擦（文 1）や誤解（文 3）を取り上げ、コミュニケーションは容易なものではないが（文 2）、それが自分の力となり、成長を助けると述べている（文 4）。これは明らかに上述した彼女の体験をもとにした内容だと言える。プロジェクト前の作文の内容は表面的で、それと比べると非常に深い内容に変わっている。アナと同様、ベッキーの作文の内容も他者を受け入れ、分かりあうことの重要性を述べ（文 5）、それが強い信念になっている（文 6）。プロジェクト前よりも内容が深まっていると言える。キャシーの作文は割愛するが、当たり障りのない内容に終始しており、文法・語彙

の向上は見られるが、プロジェクト前の作文と比べ、内容に特段の変化は認められなかった。

本稿では考察したデータの極一部のみを紹介したが、この他、3人の振り返りシートなどの考察から3人の学びを以下のようにまとめた。

1. 3人とも日本の風俗についての歴史、実情、日本人の様々な考え方などを学んだ。
 2. アナとベッキーは、風俗に関するこだわりが強く、積極的性格も手伝ってか、教室内での相互作用だけでなく、教室外の様々な人々（シェアハウスの友人たちや大家、風俗で働く人、経営者、客、旅先の人等々）との相互作用を通し、（異文化間）コミュニケーションの意義だけでなく難しさも学んだ。また、アナはコミュニケーション能力の向上を自覚している。語彙力もアナが最も向上している。
- *この2人は、冬休みにキャシーに知らせず、2人だけで行動したり、キャシーに相談せず、会社を作ることを決めたりしている。
3. キャシーは、LGBTに興味を持ち、風俗に関しては、さほどこだわりが強いわけではない。アナとベッキーの積極性について行くのがやっとなという感じであった。最後にはアナ、ベッキーと仲たがいし（上*の事柄が原因）、協働作業の難しさを学んだものの、（異文化間）コミュニケーションに関する見識は浅いままであった。

5. プロジェクト完成作品

本稿で考察対象とした「風俗グループ」ならびにもう1つのグループ「レジ袋グループ」の作品は、以下の通り YouTube で公開されている。また、2019年9月1日現在の視聴回数、評価の状況などを参考までに記した。

【風俗グループ作品】

タイトル「Beyond the Yellow Line 黄ら黄ら// Prostitution in Japan// 日本の風俗」
 YouTube URL: <https://www.youtube.com/watch?v=-q8TcvGXePo>
 2019年9月1日現在の状況：3,404回視聴、89高評価、7低評価、123チャンネル登録、19件コメント

【レジ袋グループ】

タイトル「美しい地球を守ろう～レジ袋による日本のゴミ問題」
 YouTube URL: <https://www.youtube.com/watch?v=TWBTrNq8bRk>
 2019年9月1日現在の状況：48回視聴、評価等はない

6. まとめ

課題1「相互作用はどのように進み、成果物（スクリプト）にどのように反映されるか」に関しては、3人による発想・連想・解釈があたかも1人の頭脳の中で繰り広げられたかのように融合、1つの明確なアイデアとして結実し、構成方針として決定した事例を紹介した。協働関係にある学習者たちの決定までのプロセスを示す好例であり、見本としても活用できる非常に価値のあるものと考えられる。課題2「学習者の言語習得は見られるか」については、アウトプットがうまくできない語彙を聞き手の支援を受けながら、前進と後退を何度か繰り返し、正

確にアウトプットできるまで内化するプロセスが相互作用を通して観察できた。自然な会話のやりとりでの習得過程を記録したものとして価値があるものと思う。課題 3「プロジェクト型学習を通して学習者は何を学んだか」に関しては、3人の学習者は日本の風俗文化について人との交流を通し多くを学んだ。内2人は日本人との交流の輪を広げ、やる気を向上させ、総合的に日本語能力を向上させただけでなく、異文化コミュニケーションについての見識を深めた。

7. 今後の課題

このプロジェクトワークにおける相互作用の分析は、まだ終了していない。今後、分析と考察を急ぎたい。

学会で発表して感じるのは、協働作文とピアレスポンスの違いが浸透していないということである。実際両者はどのように異なるのか様々な方法で発信する必要があるだろう。特に我々は、相互作用の分析を通し、両者の発話機能の違いなどを明らかにしていこうと考えている。

今回の課題 3 に関連し、グループ編成方法の問題を感じた。今回の実践では、興味の似た学習者 3 人で組んでもらったが、その内の 2 人のテーマに対するこだわりが予想以上に強く、結果的に 1 人を活動の外へ追いやることになってしまった。筆者のうちの 1 人が所属する大学のカウンセラーによると、同じ大学から来た学生同士はライバル心が強くなる傾向にあるという。相互作用の中にも関係を悪化させたヒントがあるように感じている。その意味でも分析と考察を急ぎたい。

今回評価については触れなかったが、我々は、協働で完成された作品は協働作品として評価する一方、制作過程については、学習者の参加の様子や振り返りシートなどを参考に、個人を評価すべきであろうと考えている。今後、学習者からのフィードバックなどから評価の公平性を研究する必要があると考える。

参考文献

- 宇佐美まゆみ (2015) 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2015 年度版」 <https://ninjal-usamilab.info/pdf/btsj/btsj2015.pdf> (2018 年 12 月 8 日)
- Cho, H. (2017). Synchronous web-based collaborative writing: Factors mediating interaction among second-language writers. *Journal of Second Language Writing*, 36, 37-51
- Li, M., & Zhu, W. (2017). Explaining dynamic interactions in wiki-based collaborative writing. *Language Learning & Technology*, 21(2), 96-120.
- Ohta, A. S. (2001). *Second language acquisition processes in the classroom setting: Learning Japanese*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
- Storch, N. (2009). *The nature of pair interaction. Learners' interaction in an ESL class: its nature and impact on grammatical development*. Saarbrücken, Germany: VDM Verlag.
- Storch, N. (2013). *Collaborative Writing in L2 Classrooms*. Bristol, UK. Multilingual Matters.